

第2節 研究業績

1. 原種配布

主として水稻、裸麦、小麦を中心に、原種の生産を行い、県下に配布した。年次別の配布数量は第1表のとおりである。

第1表 原 種 配 布 数 量									
年 度	26	27	28	29	30	31	32	33	34
水 稻	石 1080	石 17.07	石 15.12	石 25.17	石 20.43	石 20.76	石 15.48	kg 1715	kg 1760
裸 麦	760	6.32	11.80	11.48	8.30	19.17	16.46	1225	2060
小 麦	1088	3.60	3.84	4.37	3.45	1.80	3.29	193	180
陸 稻	—	—	—	—	—	—	—	—	—
なたね	—	—	—	—	—	—	16(l)	—	—
ビール麦	—	—	—	—	—	—	—	—	—
年 度	35	36	37	38	39	40	41	42	43
水 稻	kg 1356	kg 1164	kg 1418	kg 1140	kg 1749	kg 2490	kg 2540	kg 2720	kg 2490
裸 麦	1449	864	665	* 0	501	1840	1060	660	1040
小 麦	243	648	843	100	508	960	970	660	1060
陸 稻	44	29	—	—	—	—	—	—	—
なたね	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ビール麦	—	—	—	—	—	—	—	—	190

* 雨被害のため採種できず。昭和 40～42 年は生産数量

2. 試験研究

(1) 稲

① 品種

本場における奨励品種決定試験に準じて有望品種の生育、収量等を比較し、県西地帯に適する、奨励品種決定の資料とするために、昭和26年から43年まで実施し、第2表のとおり有望品種を選定した。

第 2 表 水稻の奨励品種決定試験における主な有望品種

時 期	主 な 有 望 品 種
昭和 26 年～32 年	東山 65 号(サチワタリ), シモツキ, ミホニシキ
昭和 33 年～37 年	中国 6 号(キビヨシ), ナギホ, セトホナミ, 中国 9 号(ヤマトミ)
昭和 38 年～43 年	中国 15 号(タチカラ), ヤシロモチ, コトミノリ

早植栽培に適応性のある品種を選定するために、昭和36年に10品種を6月5日に移植して比較した結果、トヨサト、ナギホ、マンリョウが優れていた。乾 田直播栽培に適応する品種を見い出すために、昭和36, 37年および40年に、のべ30品種を供試した結果、ナギホ、トヨサト、サチワタリ、南海25号、クサナギ、東海22号などが、良質多収であった。

② 栽培法

a. 育苗、および栽植様式:昭和34年に、早期栽培における播種期と畑苗代のビニール除覆適期を知るために農林17号を3月21日、4月1日、4月11 日に播種し無保温と除覆期を発芽揃い、2葉期、3葉期の3回として比較した。その結果、無保温、早期除覆区は雀害多く、また3月21日と4月1日の播種で は、出穂期が1～2日しか差がなかったため、7月中旬出穂を目標とするととき、4月1日播種の第3葉期除覆が適期と考えられた。

栽植様式については、昭和25～26年に秋落ち対策としての並木植の効果をみている。正方植と並木植を、栽植密度を変えて検討したところ、いずれの場合も並木植が多収で秋落ち対策として有効であることを認めた。

b. 本田の肥培管理:培土効果に関する試験が昭和27年と30年に実施され、培土効果が高くその時期は、7月21日ごろ(有効分けつ終止期)が適期で あった。また、培土効果と穂肥効果を比較したところ、精籾歩合は培土によって低下し、穂肥によって高くなったことから培土と穂肥効果は異なるものであるとしている。

昭和29, 30年には、桑園やサツマイモ畑を水田に転換した圃場においてしばしば稲の不稔が発生し、その原因究明と対策のために、聞きとり調査と現地試 験を行った。その結果、新開田においては7月中旬から根腐れが多くなることがわかり、幼穂形成期前10～15日の断水による不稔防止効果高く、また石灰、無硫酸根肥料、ボーキサイト区も不稔が少ない傾向にあることが認められた。

また、県西地帯は降雨量が少なくかつ漏水田の多いことから節水栽培が必要とされ、その指標を作るための試験が昭和33, 34年に実施され、活着後、断水 区(雨水も早期落水)は、常時湛水区に比べ91%の収量にとどまったが、葉が萎凋しない程度の節水区では収量に差がないことが離認された。

c. 栽培様式:乾田直播栽培に関する試験が昭和36年に播種方法について昭和37年に施肥法について実施され、播種法については、条播が点播よりもすぐれ、施肥法については、穂肥重点区において、多収という結果を得た。

d. 除草剤:昭和36年に、PCPの施用試験が行われ、第1回中耕後散布が最も除草効果が高かった。また、粒剤と水和剤では、薬害の出方はやや異なるも のの、除草効果、収量に差はなかった。昭和36, 37年にはPCP尿素について検討し、この場合も中耕後もしくは植代後施用が望ましく、移植前全層使用は 除草効果が不十分であった。また、昭和38年には新除草剤の適応性試験が行われ、FW－925, A－1114－B, PC P＋MCPBが有望であった。昭和 39年には乾田直播栽培においてPCP, DCPA, FW－925, 2, 4－Dを組み合わせて体系化を試みたが、どの組合せも非禾本科雑草に対する防除効果が 不十分であった。

(2) 麦

① 品種

県西地帯に適する奨励品種決定の資料とするために本場の奨決試験に準じて実施し裸麦については、四国裸10号、四国裸11号、キカイハダカを小麦については西海101号を、有望品種として選定し四国ムギ10号(ユウナギハダカ)は奨励品種に選定された。

② 栽培法

裸麦の品種別播種適期を知るため昭和29年に主要9品種を11月10日、20日、30日に播種して検討した結果、珍好83号は11月30日播種が良く、香川5号、白麦8号は播種が遅くなるほど収量が低下し、その他の品種は20日播種で多収となった。

25年には、熔成リン肥の肥効試験が行われ、他のリン酸肥料に比べ熔成リン肥が優れた肥効を示すことを認めた。また昭和29年には、カリ適量試験が行われ、カリは反あたり1.5～2.0貫が適量で、それ以上の施用は増施効果がみられないとしている。

除草剤については、昭和30年にC1－IPC, CMUについて検討されC1－IPCは、反あたり100gが適量で、この場合、籾穀覆土の必要はないものと思われた。CMUは50gの処理量においても薬害がはなはだしく使用が困難であった。

(3) その他

大豆、バレイショ、ナタネ、サツマイモ、サトウキビについて品種の比較試験が実施され、第3表のような結果を得た。

第 3 表 大豆・バレイショ等品種比較試験

作物の種類	試験年度	有 望 品 種	備 考
大 豆	昭和 27. 28 年	玉綿, 伊豆大豆, 池田 21 号	
バレイショ	27 30	北海 2 号, 島系 30 号 ウンゼン, 西海 4 号	種いも用 春作バレイショ
ナ タ ネ	27	農林 14, 21 号	
カン シ ョ	27	中国 5 号	飼料用
サトウキビ	28	CP29-116	多収であるが糖度低く普及性なし,